

「か、こいいい、大人を目指して

緑陽中学校三年 新井宗太郎

今年の四月、僕の父は、陸前高田市に向か
いました。東日本大震災で大きな被害を受け
た、東北の地。父は、祖父やおじと共に、陸
前高田市での二ヶ月の滞在を決めました。自
分たちの「技術」を「復興」に生かそうとし。

僕の父は、建設会社に務めています。父と
祖父とおじを中心に経営している会社です。
僕は何度か、仕事現場に連れられてもらっ

た事があります。驚くほど重い物を運んだり、
大きな車を運転をしたりして、姿を見て、
率直に「か、こいいい」と思いました。建設会
社の人たちは、夏の暑い日も冬の寒い日も、
こうやって一日中外で働いているのだと知り
ました。そのひたむきに働く姿に、あの汗水
を感した事を覚えています。

そんな姿を見たりうち、僕は父に仕事についてい
ろいろと聞いてみたくなり、ある時話を
してもらいました。

「大変なのは、危険な場所や作業がたくさんあることかな。自分たちだけでなく、その土地の人たちにも事故が起きないように注意しないといけないんだよ。」

「うれしいことは、みんなの暮らしが便利にたすのを実感できたこと。景観をよくするた
めは、観光地の電線を地中に埋めて、見えなくする仕事もしたこともあるよ。」

僕は話を聞きたがら、そういう専門的な技術が必要とする仕事や、みんなのためになる

仕事ができないのは、すごいことだと思いました。そういうえは、父と一緒に車で出かけていると、時々遠くを指さして、

「このきれいな道路は、お父さんたちが仕事もしたものだよ。」

と教えてくれた事があります。そんな時、僕はとても誇らしい気持ちになります。

——そして、このように「技術」を生かして、

「復興」の手助けをするため、この四月、父や祖父たちは、東北に向かっただのです。今、

中小企業の経営は大変だといわれていますが、
それでも、陸前高田市に滞在することを決め
ました。

大震災から、もう二年以上経ちますが、ま
だまだ復興は進んでいません。想像を絶する
被害の中、当時NTT電話局があった所も、
津波で流されたそうです。電話は生活に欠か
せません。父たちは、次に地震が来ても大丈
支なようは、電話局を高台にうつす工事に携
わりました。少しでも前の生活にも出れる手

伝いをするため、二ヶ月の間、僕たち家族と
離れて仕事をしました。その土地の多くの方
が、ありかとうしと言ってくれた事がとて
もうれしかつたと聞きました。

僕たちは先日、宿海学習で神戸に行き、企
業別訪問学習を行ったのですが、その企業の
人たちと、父たちの姿が重なりました。僕が
訪問した「カネキツブリカーブ」では、仕
事だけでなく、阪神淡路大震災後の復
興の道のりについて、学ぶことになりました。

た。担当の方は、「震災の時、被災した地域の人たちを自分たちの会社によんで、自社で作っていた食品を配りました。会社にできることを精一杯やろうと思いました」と話して下さいました。多くの社員が出勤する事もできず、仕事は停止して、直に商品を並べたことでも可能な状況で、なお地域の人たちのために自分たちのできることをする姿は、僕は強い感動を覚えました。

こうして父や祖父たち、訪問した企業の人

たちの働き方や思いに触れ、僕はその会社の人たちの「技術」や工夫、熱い思いが、地域の復興や活性化につながっているのだと、そのすばらしさを実感しました。

あすTV番組では、外国の困っている地域の人たちのために、日本の「井戸掘り」や「かまぼこ作り」の技術を伝え、仕事への姿を見ることがあります。また、中小企業の斬新な商品や技術のすばしさを紹介する番組では、新しいアイデアを取り入れた防災グッズや生活

用品など、会社の人たちの努力のおかげでつくられていくのも見たことがあります。一人一人の働く大人の姿、地域や国を支え、僕たちの「今」を支えてくれるのだと、深く感じています。

今、日本では、若者の就業率の低さが問題となっています。僕たち一人一人が、未来に向かっていくこと、社会を支える「一人」にならなければならないように、そのための力や志を育てることが大切です。

僕も将来、人のためになるようなやりがいのある仕事に就きたいという夢をもっています。そして、父のようには自命に危険があることをわかっていても、困っている人のために、自分の力を使えるような人になりたいと思っています。――国や地域を、そこに生きる人たちを、日々こつこつと支えていける、「かっこいい」大人の一人を目指して。